

ボッチな僕が異世界最強です

カムクライズル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神崎仁15歳はクラスに溶け込めていない“ボツチ”であったが、ある日交通事故によって命を落とした。それは女神が原因だった。その女神は異世界への転生と能力を授けるのだが、神崎仁は女神の力を奪い取った。奪った女神の力で最強となって異世界へと転生が行われ、異世界の転生先はアリティア王国の貴族の子供としてレイリアルフアードという名となった。貴族での生活は何1つ不自由のないものだった。そして15歳となった日に1人の男性が現れた。「私の学園に来ないかい？」これに乗る気はなかったが、父から卒業するまで家に入り禁止された為、『アリティア高等学院』へ強制的に入学させられる。

目次

第2話	01
10	1

今日、僕は死んだ。普通の交通事故で。

そして閻魔のいる地獄へ向かうのだと思っていた。だが違った。

目を開くと真っ白な空間が視界に映る。ここが死後の世界だと勘違いしそうな時、前から眩いばかりの光が起こったので、反射的に目を閉じた。

「あなたが神崎仁さんですか？」

誰もいない空間に女性の声が聞こえる。目を開けると、そこには露出度の高い白い服を着ていて、背中に大きな翼を生やしている、ピンク色の髪の色をした美女がいた。

「ああ」

「私は女神ミュランという者です。」

こいつが女神だとかは納得はしたが、未だにこの状況には慣れそうにない。まず女性と1対1という状況が無理だ。女性は男よりも姑息でいやらしいから。

「神崎さん、あなたは女神である私のせいで死んでしまいました。」

ミュランは頭を深々と下げ、数秒ほど経って頭を上げた。目には涙が浮かんでいる。だが嘘泣きなのが分かりや過ぎる。泣けば許して貰えるという、浅ましい考えが隠しきれてない。

「これであなたが許すとは思いません。」

言葉ではなんでも言える。まず本気で謝っても、許す気は一ミリも持ち合わせていないけどね。

「なので私はあなたに、異世界への転生、能力を渡そうと思っっています。」

異世界への転生と能力。まるでライトノベルの小説だ。そして異世界に行くことで1人で過ごせるかもいれない。悪くない。

「じゃそれで。」

ミュランの顔は泣き顔から笑顔へと早変わりし「はいっ!」と答える。やはり嘘泣きだった。僕のイライラは顔には出ないが、心の中で怒りという感情が噴出している。

ミュランはそんなことにも気づかずに、右手に杖を出現させ、呪文を唱え始めると、僕を中心に魔法陣が出現し、唱え終わると魔法陣は僕から消滅した。

スキル『魂狩り』を取得しました。

とどこからともなく声が聞こえた。

「このスキルの能力を調べるにはどうしたらいい?」

「はい、ステータスやスキルなどは念じることで確認することができます。」

ステータスを表示するために、頭の中で念じてみたところ、目の前に文字が表示された。

◆〈神崎仁〉◆

種族：人間

年齢：15

性別：男

レベル：1

HP：13

MP：11

力：6

魔攻：12

守備：8

魔防：9

技：8

速さ：11

取得スキル

魂狩り

これがステータス、まだレベルが1のためか、能力値はとても低かった。そして取得スキルの魂狩りの効果を念じ、表示させた。

『魂狩り』

対象の心臓部付近に触れることで相手の命、経験値、スキルなどを奪うことができる。

このスキルは相手の命だけであったり、能力と経験値だけにすることを選ぶことができる。また、このスキルを発動させた場合、止めることは不可である。そして相手の所有しているスキルを確認することとは、このスキルではすることができない。

『魂狩り』はとても有能なスキルであることに驚いていた。そして思いついてしまった。

「この女神の力をこのスキルで奪うことができれば…。」

「あのおう、確認はすみましたか？」

「っ！…ええ確認できました。」

女神の能力を奪うことを考えている時に声をかけられ、かなり驚いてしまったが、女神は気にしなかつたので、ひとまず安心した。

「それでは、異世界へのゲートを開きたいと思います。」

ミュランは呪文を唱えだすと、目の前の地面に扉が出現しだした。呪文を唱え終える頃には、扉が開いた状態で出現していた。

「この扉に入り込むことで、神崎さんは異世界への転生が完了となります。ほかに質問などはありますか？」

「…僕が異世界に行つて後も、あなたは関与し続けるのですか？」

これが最大の問題だ。もし関与があるなら、厄介なことをしないといけなくなるが、関与がないなら能力を奪うだけでいい。できれば後者がいい。

「いえ女神である私でも、異世界まで関与することはできません。」

その言葉を聞いて安心していた。そして決意する。

女神の能力奪還を。

「最後に握手してもらえますか？あなたのせいで死んでしまいました

が、感謝はしているので。」

ミュランは毒を吐かれたことよって少し引きつった笑顔を浮かべながら、手を前に差し出した。そして僕も手を差し出し、握手が行われるとミュランは思っている。そんな考えを裏切って、僕の手は女神ミュランから見て、左の胸に収まっていた。

「貰うよ、君の力」

ミュランは、感情を一転させ、冷たい目でこちらを見ていた。

「…神に欲情するなどあつてはならない。さつさと離せ、人間。」

隠していた本性を表した。性格が腐っても女神。とても女子が出すような眼力ではない。目と目が合うだけで、体の自由が奪われるようだ。僕は眼力に負けて、ミュランから手を放した。

その直後、ミュランは胸を押さえながら苦しみ始めた。女神に対して、スキルが有効なのは完全に運頼みだったが、成功した。

「神崎仁…何をしたっ!？」

どうやら女神ミュランは僕のスキルを知らないらしい。知っていたら握手などする訳がない。

だがただの人間が行えるのは、スキル使用しか可能性がないのに、何故気づかないのだろうか。

へスキル『魂狩り』により、女神ミュランの全てのスキルと経験値を強奪開始しました………強奪終了、『時間操作』、『天災操作』のスキルを獲得、膨大な経験値を対象者に移行、ステータスを更新します

………更新完了。スキル『魂狩り』を終了します。

僕はステータスを表示させるため、念じた。表示されたステータスはかなり飛躍されている。

◆〈神崎仁〉◆

種族：半神

年齢：15

性別：男

レベル：121

HP：280000／280000

MP：8900／8900

力：4500

魔攻：6000

守備：4000

魔防：4600

技：4200

速度：4000

取得スキル

『魂狩り』『時間操作』『天災操作』

魔法

炎魔法系（レベルEX） 水魔法系（レベルEX） 雷魔法系（レベルEX） 風魔法系（レベルEX） 光魔法系（レベルEX） 重力魔法系（レベルEX） 回復魔法系（レベルEX） ……

『タイム・ストップバー時間操作』

所有者の15m以内の時間を止めることができる。なお、時間を止めた空間の物体は触れることはできる。ただし一日で10分しか止めることはできない。それを超えると、所有者の時間も、徐々に停止

していく。

ウエザー・サンクチュアリ
『天災操作』

地震、竜巻などの自然現象を作り出すことができる。だが魔力もかなり消費するので、魔力切れには注意が必要。

「人間の分際で女神に逆らい、力を奪ったのか!? 許さん! 許さんぞ!」

能力を奪い取ったためか、地面に這いつくばりながら僕を罵声し出した。体の自由を奪われるような眼力もなくなっていた女神は、哀れで滑稽だった。それを見ると笑いが止まらなかった。

そしてお別れだ、女神ミュラン。

「じゃあね、女神ミュラン。この力は僕の物だ。」

そう言い残し、僕は床にある扉に足を踏み込んだ。ゆっくりと下に落ちていく、そして意識がだんだん薄れていった。

『女神の加護』を取得しました。なおこのステータスは特殊なので表示されることはありませんのでご注意ください。<

この機械の声は当然、神崎には伝わらず、この能力の意味も知らぬまま、異世界への転生が行われた。

辺りに赤ん坊の声が響いた。

産婆から大事そうに抱きかかえられながら、母親の元に渡された。

「おめでとうございませす、元気な男の子ですよ。」

「ストリー、よくやってくれた、これでアルファード家の世継ぎが生まれた。」

夫に妻が労いの言葉をかけられ、疲れ切った表情の中、涙を流していた。

「あなた、この子の名前を覚えてもらってもいいかしら。」

布に包まれている赤子をゆつくりと自分の手の位置まで運び、体を妻に向けた。

「この子の名はレイ、レイ＝アルファードだ!。」

誇らしげに名前を発表する父。失笑する母。だが母はある異変に気付く。

「ねえ、あなた、レイがこっちをじつと見てるけど…話を聞いてるように見えない?。」

「まさか。今さつき生まれたばかりなのに言葉は分からないだろう。」

「…そうね、そんな訳ないわよね。」

2人はそう勘違いしているが、僕は言葉を理解していた。てつきり言葉は分からないものだと思っていたが、そうではなかった。もしかしたら女神の力のおかげなのかもしれない。

少し経つと扉が開き、部屋に入るや否やトテトテと歩きながら少女は僕に近づいてくる。僕の近くに来ると、笑顔で僕を見つめてきた。

「こちらアルトリエ、お前は部屋で待ってなさいと言っただろう?。」

「どうやら娘の様だ、待機させられていたが、我慢できず来てしまったらしい。」

「ごめんなさい、お父様。私、早く弟の顔が見たかったです！」

キラキラとした目で父親に訴えかける。それに父親はあっさりと負けてしまい、母親の近くに座らせた。そして僕の顔をつつき始める。

「すごく嫌だ、いまずぐやめてほしい。」

「ストリー、この子を我がアルファード家に恥じない子を育てていこうな。」

「はい、あなた…。」

僕のことを忘れて、完全に2人の世界に入ってしまったので、この幼女を止めることはできそうにない。だが強烈な睡魔が来たため、僕は夢の中へと逃げていった。

第2話

僕がこの異世界に来てから数年ほど経った。

アリティア王国は大国である。

財政は黒字、政治も良好、同盟国との関係も友好的とこの異世界の中でもトップクラスの国である。国王は平和主義の国民思いの男なので、国民も信頼を置いており、彼が若くして国王になって数十年間、問題は一切起きなかった。

そしてこの国には国内では国民の治安の維持、城の警備、王族の警護などを担当し、国外では盗賊、魔物討伐を担当する『騎士団』と、ありとあらゆる魔法を研究し、国の設備強化、医療の発達に力を入れる『魔法団』が存在する。

さらに住宅区は指定されている。王族は最北端にあるアリティア城、貴族、官僚、騎士などは北区、施設の研究者や図書館の職員などは東区、一般階級の人たちなどは西区となっている。南区は宿屋など外から来た人たちの場所となっている。中央区は市場、武器工房など様々な施設が存在する。

そんな国の貴族として僕は生を得た。そして僕は髪はお伽噺に出てくる王子のように輝く金髪となり、顔は輪郭の整っている女のような美男子へと成長した。そんな僕を見て、父親は僕に英才教育を施し始めた。

大方、有能な後継ぎを作るために行われたのだろうが、すでに人間の域にはいない僕にとっては退屈な時間だ。しかも僕は家を継ぐ気などない。

だから僕は家からたびたび抜け出し、西区にある国立第一図書館へ向かうため区の門へと向かった。北区は上流階級の区なので、区の入りに警備がしかれている。

「許可書を…あ、すいません。」

父親が貴族のため、顔パスで通ることができる。僕は門を通過し、西区へ向かった。国立第一図書館には魔導書を読むために向かった。

魔導書は普通のこととは記されていない。実用されてない魔法の理論、存在していない幻獣の実態、誰も作り出すことのできない武器などが記されている。それが魔導書だ。魔導書は暗号化されているので、簡単には読むことができない。なので知識欲をくすぐる。

そんなことを考えている間に、僕は目的地へとついていた。そして周りに人影がないことを確認した。

「…よしだれもいないな。」

本来、魔導書は一般公開はされていない。さらに重要なものは、上流階級の貴族でさえ見ることはできない。見ることができるのは、各国立図書館の所長や国王しかできない。

「…重力浮上」
グラビティ・ポイント

だからいつものように僕は重力浮上を使い、建物の中に侵入し、魔導書の保管されている魔法の扉を開け、中へと入っていった。本来扉には、魔法の鍵がかかっているが、膨大な魔力を注入することで、開けることができるのを知っているため、人さえいなければ、簡単に入ることは可能である。

「こないだの続きでも見るか…」

僕は前に読んでいた魔導書の続きを読もうとした。だが前置いていた場所に魔導書がなかった。近くを探してみても、見つからない。原因が分かった瞬間、体に鳥肌がたった。この部屋に誰かが入っていることが。

「そのまさかじゃよ、まさかこのような子が侵入しているとはのう。」
後ろには白い豊かな髭をたくわえている老人がいた。服装は賢者の服なのでおそらくこの国立図書館関係者なのだろう。手にはこの前、僕が読んでいた魔導書があった。

「…いつから。」

「ほっほっほっ、最初からじゃよ。魔導書1つ1つは魔法で閉じ込められておる。それが破られれば、魔法をかけた本人に、魔法が取れてしまったことが伝わるのじゃよ。」

まさか、魔導書自体にセキュリティをかけられているとは思ってこみなかった。もしかしたら、扉を開けた時点に、すでにばれていたか

もしれない。僕は目の前の老人を警戒し始めた。こいつは何故、侵入されていることをばらさないんだ？と。普通なら老人は僕が

「解いただけでなく、解読もできるとは恐ろしい子じやな。」

「…まあ1冊だけで、2週間も解読に使ってたけどね。」

老人はいつも開いていない目を大きく開き、口を開けて呆然としていた。

本来、魔導書は熟練の研究者でも、1冊を解読するだけで何年以上もかかる。下手すればそのまま何年も解けなかったものを、まだ数年しか生きていない少年が解いたのだ。

化け物扱いか？と思って見ていたが、老人はそう思っていないかった。近くに置いてあった杖を手に取り、勢いよく立ち上がった。

「面白い！面白いぞ！名を何という！」

弱弱しい老人が力強い声をあげ、僕に近づいてくる。僕は名前を教えたくはない。教えたくはないが、騎士団に連行されたとき、貴族であることを伝えることで、金で罪を解決させてくれるかもしれない。

「レイ＝アルファード。」

「あのアルファード家の子供か！ここまで才能に溢れている子がいるとはのう……」

「関心なんていらなからさ、僕は名前を言ったんだ、あんたの名前を教えてよ。」

「わしの名前はボラルデイ、この国立第一図書館の所長であり、伝説の賢者の1人なのじや！」

ボラルデイはドヤ顔で言ってきたのだが、僕は知らない。伝説の賢者とはなんなのか。

「伝説の賢者って何？」

さっきのドヤ顔から一転、かなり気分が落ち込んでいる。

ボラルデイにとつてはこの自己紹介は定番であり、いままで「伝説の賢者って何？」という返答は今まで一回もなかった。